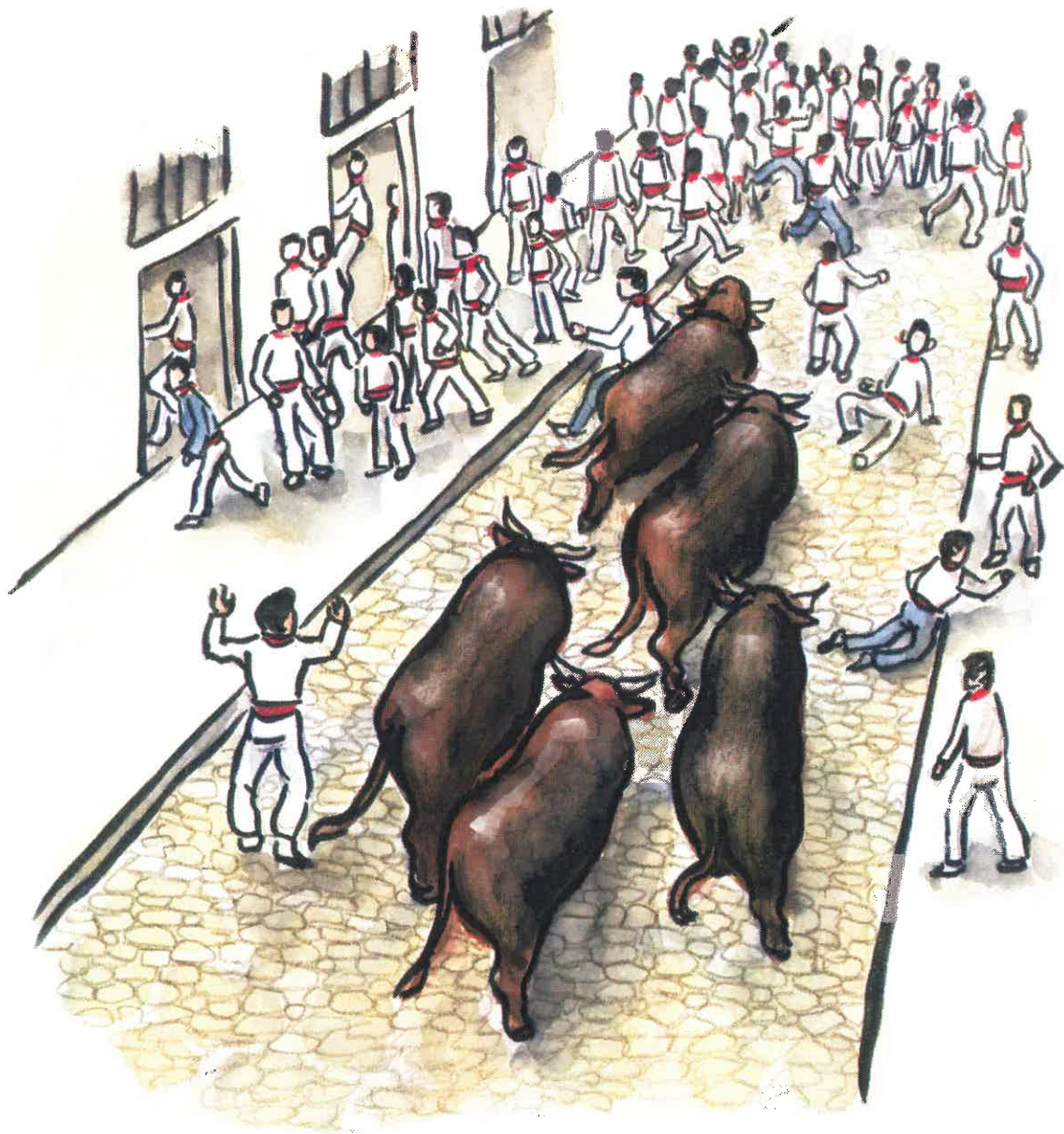


サビエルで結ばれた

スペインパンプローナからこんにちは!

訪問記念作品集



「山口公園」完成記念パンプローナ市訪問団実行委員会

もくじ

・ はじめに	1
・ 両市長メッセージ	2
・ 山口公園誕生まで	3～5
・ それぞれのパンプローナ	6～7
・ 開会式で市民交流	8～12
・ サビエルで結ばれた山口とパンプローナ	13
・ さようなら王子さん	14
・ 訪問団員手記	15～20
・ 訪問団員紹介	21～23
・ 新聞掲載集	24～26
・ パンプローナからこんにちは	27
・ 思い出アラカルト	28





「山口公園」完成記念パンプローナ市訪問団実行委員会委員長
多々良孝一

山口市の姉妹都市スペイン・パンプローナ市にヨーロッパ最大、スペインでも唯一の日本庭園を配した「山口公園」が1997年春、完成しました。この「山口公園」の建設にあたっては、山口市の造園技師が設計・指導協力を行いました。そして、パンプローナ市長自ら「山口公園」を“友好の果実”と賞賛されたとおり、両市民の心を結びつける素晴らしい公園となりました。

この冊子は「山口公園」開園式に参加するため、6月27日から7月4日までスペインを訪れた山口市民40名の訪問団員が撮影した写真や交流の感動を綴った作品集でございます。

是非、皆様にご覧いただきパンプローナ市を、身近に感じていただきますことを願っております。



両市長メッセージ

待ち望んだ友好の果実

佐内正治
山口市長

ハビエル・チョウラウト
パンプローナ市長

皆様に厚くお礼を申し上げます。

建設に携わられたパンプローナ市、パンプローナ市議会、建設関係者、また、ご協力を賜りました山口市造園協会の

「山口公園」が、パンプローナ市民に長く親しまれ、愛され続ける公園であってほしいと祈念いたします。

ました。また、このような美しい公園に、「やまぐち」の名前をつけていただきましたことに大変感謝します。

姉妹都市提携から17年、地理的な距離を乗り越え育んでまいりました友好は、証ともいえる「山口公園」を生み

開園式に出席した40人の山口市長は、その広さと美しさに感動しました。

姉妹都市提携15周年を記念して建設された「山口公園」の開園を心から称賛するものです。

開園式に出席した40人の山口市長は、その広さと美しさに感動しました。

姉妹都市提携から17年、地理的な距離を乗り越え育んでまいりました友好は、証ともいえる「山口公園」を生み

ました。また、このような美しい公園に、「やまぐち」の名前をつけていただきましたことに大変感謝します。

「山口公園」が、パンプローナ市民に長く親しまれ、愛され続ける公園であってほしいと祈念いたします。

建設に携わられたパンプローナ市、パンプローナ市議会、建設関係者、また、ご協力を賜りました山口市造園協会の

皆様に厚くお礼を申し上げます。

山口市民の皆さん、パンプローナ市民は今日という日に大変満足しています。

それは、すばらしい日本庭園「山口公園」が完成したからです。

「山口公園」は遠い距離を克服し、日本とパンプローナ市との技術者協力により完成したものです。

パンプローナ市民の感謝の気持ちを私が代表して伝えたいと思います。

四世紀前、サビエルによりナバラと日本との間に結ばれた友情が、今日のこのすばらしい庭園に幸ったと思います。

山口市長 佐内正治

パンプローナ市長 ハビエル・チョウラウト



山口公園誕生まで

1988年 (昭和63年)	年末	パンプローナ市長が市内の建築会社の敷地跡の公園予定地に「山口公園」そしてその近くを通る道路に山口通りと名付ける予定を発表
1990年 (平成2年)	9月	パンプローナ市長のコメントより、山口広場としてすでに10万平方メートルの土地を確保していること、また、この広場を日本風にする計画で山口市へ協力要請。(すぐ隣のプラネタリウムはこの数カ月後に着工に入った)
1994年 (平成6年)	9月	パンプローナ市より15周年記念行事について山口公園の一部を本格的な和風づくりの「日本庭園」とする希望が提案される
	11月	日本庭園の参考資料として、庭園、茶庭などの専門書、山東省日本庭園計画概要説明書、常栄寺庭園実測図などをパ市へ送付 パンプローナ市より山口公園内日本庭園の全プロジェクトの設計図が山口市に届く。人口池の回りの柵に囲まれたスペースは約6000平方メートル、同時に、植える植物に関するアドバイスの要請がある
1995年 (平成7年)	1月上旬	パンプローナ市より造園技師の派遣の依頼を受ける
	1月下旬	事前調査のため山口市造園協会会長多々良孝一氏、同協会会員小田茂樹氏を派遣
	2月	姉妹都市提携15周年にあたり、記念行事参加のためアルフレッド・ハイメ市長を団長とするパンプローナ市訪問団が来山。ハイメ市長は同協会から提示された設計図を承諾。公式に「山口公園」造園がスタートする。
1996年 (平成8年)	6月	同協会会員多々良健司氏が工事工程の相談、樹木、石の選択などで当地を訪問
	9月	同協会より5名(うち3名はボランティア)の技師、団長岡本薫氏(現同協会会長)、副団長赤井哲春氏、今井曠介氏、岡部敏雄氏、田村俊夫氏が日本を出発し現地で当地の技師たちとともに本格的な建設に従事する
	10月	庭園の緑地化が進み、岩石の配置、八つ橋の整備など作業が大詰めを迎える

1997年
(平成9年)

3月 春になり天候が回復し植樹作業が完了する
完工式の日取りの調整に入る

4月 公園の開園式が6月30日に決定する



それぞれのパンプローナ

山口公園の建設に協力された山口市造園協会の造園技師のみなさんにパンプローナ市での思い出や苦勞話をお聞きました。

●「山口公園」が完成しました。パ市長自ら「友好の果実」と称賛されましたが、みなさんご覧になっていかがですか。

多々良(孝)「予想以上の出来だと思う。多少の思い違いはあるけれど、こちらの意図は十分伝わっている。95%思い通りの完成。文化の違う国でよくここまで造ってもらったものだと思う。」

岡 本 「スペインの造園技術の高さに驚いている。」

●ところで、みなさんパ市の印象は？

赤 井 「無理な看板や信号機がなく、緑が多く静かなところ。」

多々良(健)「歴史と伝統を感じるまち。大きすぎず、とても居心地の良いまち。」

岡 本 「市街地は歴史を感じさせる。古さと新しさがうまくドッキングしたまち。
まちは美しく、花が多く、時間がゆっくり流れていくような印象を受けた。」

田 村 「静かに時を重ねた、深い味わいのある町並みが心に残る。」

岡 部 「美しく、心が落ち着くまち。昔から都市計画に添ったまちづくりを実施したからこそ、現在のまちになったのだと感じた。」



多々良 孝一さん

●みなさんの技術協力により「山口公園」が完成しましたが、協力されてどのように感じておられますか。

岡 部 「まず、このような仕事に協力できたことに対し感謝しています。生涯の思い出になりました。また、パ市当局の良い公園を造ろうという取り組み姿勢に感心しました。」

岡 本 「海外で公園建設に参加できた体験は一生の思い出になりました。一週間だけの滞在がこれほど話題となり、人の輪を広げることができたことに驚いています。」

田 村 「日本文化が周囲の景観と溶け込めるか心配したが意外な融合ぶりに安心しました。」

多々良(孝)「姉妹都市に日本庭園を建設する事業を山口市造園協会に委託していただき、大変感謝しています。造園技術が日西親善のお役に立って、こんなに嬉しいことはありません。会員一同、パンプローナ市が身近になりました。」

●工事中、一番印象に残っていることは？

岡 部 「まず、滞在日数と作業量を考え、これは本気で取り組まなければならないと思いました。毎日疲勞が溜まりましたが、現地の労働者の明るさに助けられ、大変楽しく仕事ことができました。」

赤 井 「市関係者、技術者に熱心に協力してもらったこと。」

多々良(健)「工事方法の打ち合わせで活発に討議したこと。また、こちらの要求を納得するまで受け入れてもらえたこと。」

岡 本 「パ市側の日本庭園に関する知識が豊富であったこと。また、工事中、連日マスコミが取り上げてくれたこと。」



多々良 健司さん

●今後の「山口公園」について一言。

岡 本 「植樹した木が生長し、日本庭園のもつ静寂な雰囲気の中で多くの市民に利用していただければこれ以上の喜びはありません。」

赤 井 「市民の憩いの場となれば。」

多々良(健)「ごく普通の都市公園として、きたんなく利用してほしい。」

多々良(孝)「10年先、日本庭園のもつ、わび、さびが表現できるためには、維持管理が必要。特に池の水の管理と、樹木の剪定が重要です。そのため今後は技術者同志の交流が必要です。年1回は指導に行きたい。また、日本の四季を表現する、桜、菖蒲など植えたい。」



第3回目の技師派遣

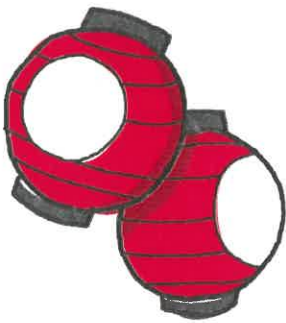
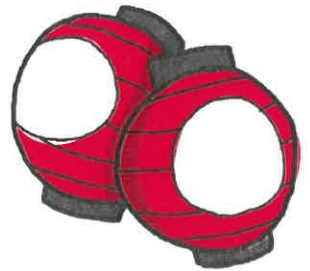
左から 今井さん、岡部さん、田村さん、岡本さん、赤井さん

開会式で市民交流

6月30日 月曜日

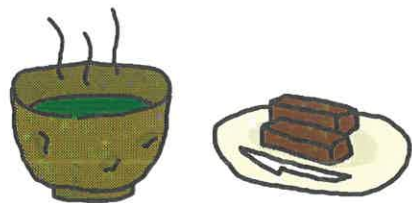
「山口公園」開会式に先立ち、パンプローナ市民に日本や山口市のことを紹介するための市民交流を計画しました。

午後8時。それまで降り続いていた雨も訪問団員の気持ちを通じたのか、運よく止み、準備した400個のちょうちんに火を灯しました。ちょうちんに彩られた「山口公園」を舞台にパンプローナ市民との交流を行い、たくさんの人たちと和やかな時間を過ごしました。



抹茶の接待

訪問団員の中で、お茶をたしなむ方々が日本のわび・さびの再現、抹茶の接待をされました。お茶の道具一式をパンプローナへ持参、市民の前でお茶を点てました。お茶席には黒山の人だかり。甘い外郎を食べながら、苦い抹茶をいただく。パンプローナのみなさん「エスリコ(おいしいですか)?」



大内のお殿様

山口祇園祭の「大内のお殿様」をパンプローナ市民と総踊り。踊りの輪が時間とともに大きくなって、子供も大人もおおはしゃぎ。

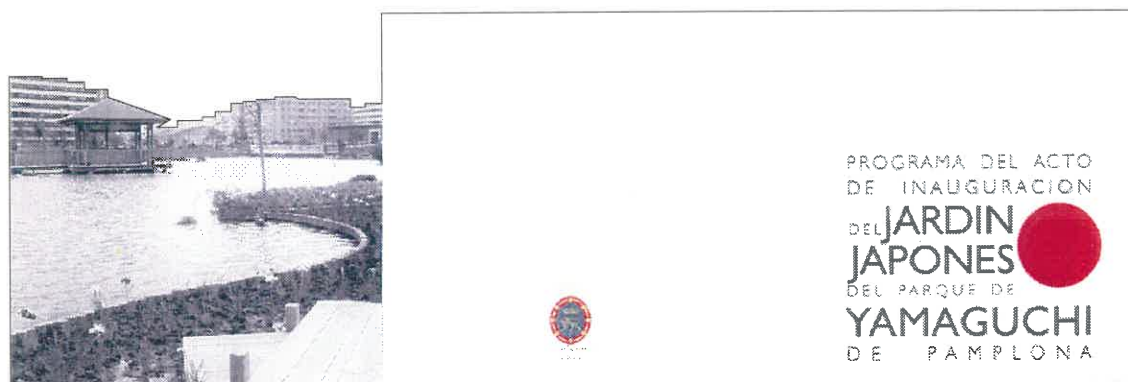
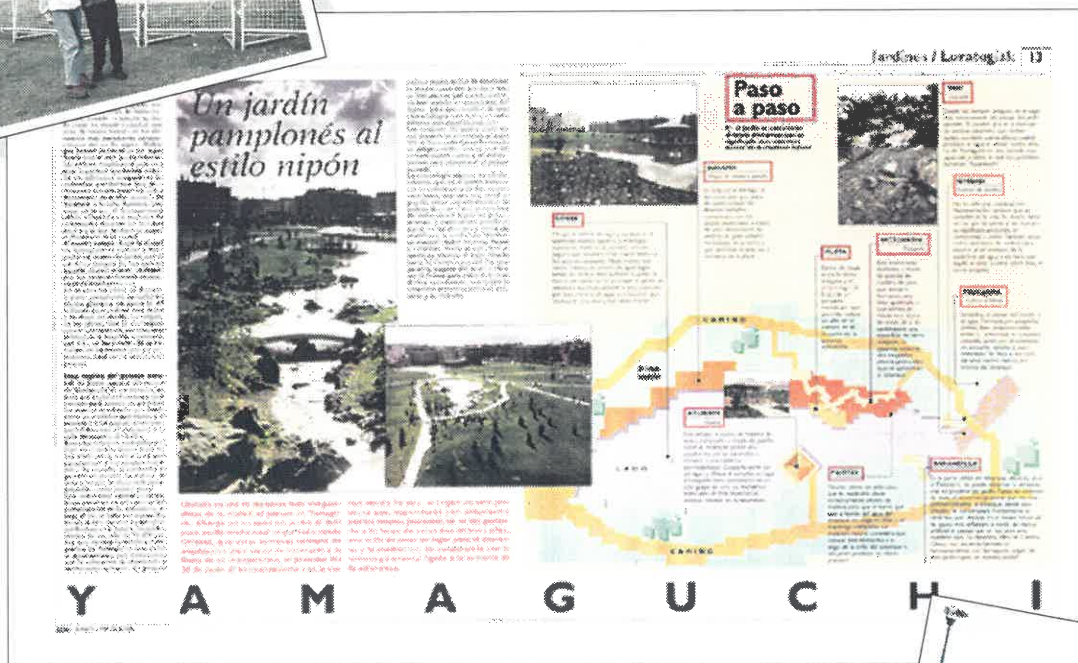
みんな笑顔で、「ケ アレグレ(楽しいね)!!」



大内の〜♪

お殿様〜♪





開園式で配布された公式パンフレット





山口公園内の池に浮かぶ
特設ステージで、両市長の
スピーチやスペインの伝統芸能が
繰り上げられる。



フィナーレは、大花火大会

日時	スケジュール
6月27日(金)	JR小郡駅 出発
6月28日(土)	マドリッド視察
6月29日(日)	ホテル出発 トレドへ マドリッド空港発 パンプローナ市へ 公式晩餐会出席 パンプローナ市、山口市訪問団、 ドイツ パーダボー市長 フランス バイヨンヌ市長など出席
6月30日(月)	山口公園にて大内のお殿様、お茶の接待などで 開園式開催まで市民交流
20:00	
21:30	山口公園開園式 両市長の挨拶
22:00	スペイン伝統の音楽、踊り、巨人の踊りなどを披露 こいのぼりの掲揚
24:00	
7月1日(火)	風力発電所視察 ハビエル城視察 オリテ城視察
7月2日(水)	パンプローナ出発 バルセロナへ移動 グエル公園視察 聖家族協会視察
7月3日(木)4日(金)	バルセロナ出発 山口へ移動



新聖堂がベールを脱いだ

1991年に火災消失したサビエル記念聖堂の再建が現在進んでいます。

97年9月7日の日曜日。あいにくの雨の中、信者や市民など200人が集まり新聖堂の上棟式（棟上げ式）を祝いました。

10月上旬、それまで青いシートで覆われていた高さ43メートルになる2本の尖塔がついにベールを脱ぎました。真っ青に澄み渡る秋空にそびえ立つ2本の純白の塔。太陽の光を浴びてまばゆいばかりに輝いています。

同月12日には、聖堂の鐘の「祝別式」（鐘のお披露目）が行われました。打ち鳴らされた鐘の音は我々の心に懐かしく響きわたりました。1本には9個の鐘が、もう1本の塔には時計とオブジェが取り付けられました。

新しいデザインによって生まれ変わった新聖堂は「沈黙と感動」を与えてくれる山口のシンボルになることでしょう。4月29日、いよいよ献堂式が行われます。



さようなら王子尚三さん

移 住

1980年、山口市とパンブローナ市は姉妹都市となりました。その一年後、市民訪問団員としてパンブローナ市とハビエル城を訪れた王子さんは、フランシスコ・サビエルの生き方に感動し、一目でこのまちがすっかり気に入って、ここに住むことを決意しました。

当時、王子さん57才。こうして妻との見知らぬまちでの新しい生活が始まりました。

入 院

95年11月、胃の手術のため入院するという手紙が届きました。97年の年賀状には、「96年は癌との戦いでしたが少しずつ快方に向かっています…」とありました。そんな中にも、王子さんは頻繁に「山口公園」工事現場を訪れ、結果を写真とともに山口市へ送り続けました。遅々として進まぬ現場に、本人のせいでもないのに、「前回と変わっていませんが……。」と申し訳なさそうに書かれていました。

96年6月、二人は移住10周年の記念として山口市にサラサーテのCDを寄贈することにしました。「ツイゴイネルワイゼン」を作曲したサラサーテはパンブローナ市が生んだ作曲家で、まちには「サラサーテ通り」があります。この曲を聞いたら第二の人生をこの土地で歩んでいる夫婦がいることを思い出してくださいという二人のメッセージとして。

開園式

97年6月27日から8日間「山口公園」開園式に出席した市民訪問団が帰国後1ヶ月余、王子さん死去の知らせが届きました。出発の一週間前、40人の団員名簿を送ると、一人一人を確かめるように「皆さんに会いたい!開園式で会いましょう!」と電話のむこうで少年のような弾んだ声が聞こえました。しかし、開園式には本人の姿は見られず、妻の瞳さんは「早く家に帰ります。開園式や皆様の様子の一部始終を主人に報告しなければなりません。主人が首を長くして待っているでしょう。」と走るように会場を後にしました。渡西11年目の夏でした。

8年前、王子さんがハビエル城に植えた桜は、毎年、みごとな花を咲かせています。この桜のうち数本は「山口公園」の滝の周辺に移される予定です。「ハビエル城」と「山口公園」、王子さんが愛して止むことのなかった二つの土地から自筆の花便りが届くことはもうありません。

やすらかに王子さん

今年10月中旬、新サビエル記念聖堂に新しい鐘が取り付けられ、なつかしい音が市内に響き渡りました。青空に映える白亜の二本の塔は、1本はキリストが世界に平和をもたらし災いから守ってくれる願いを込めた避雷針が、もう片方は平和の鐘が位置しています。遠い異国の地で住民に守られ、寄り添うように生きてこられた王子さんご夫婦。新しい二本の塔に、「逆サビエル」と親しまれ、草の根の国際交流を身をもって実践してこられた二人のお姿がかさなります。

王子さんのご冥福を心からお祈りいたします。



神とワイン

福田礼輔



白夜の国から日出ずる国へと旅立った修道者サビエル。450年前、雲烟はるかな行程に裏打ちされている神への祈り、今回マドリッド、パンプローナ、バルセロナと旅を重ねるにつれ、中世この国の人々がどれほど神を身近に感じていたことか、古い寺院の、また古い町並みの石畳に神と人間のつながりの歴史を垣間見ることができた。

パンプローナはピレネー山脈の史都であるだけでない別な顔も持っていた。それは、名曲ツイゴイネルワイゼン（ジプシーの月）を作曲したパブロ・デ・サラサーテの生まれた町であり、「日はまた昇る」の作家ヘミングウェイの住んだ町でもあることだ。

お互いに中世まで遡ることのできる歴史と文化を持つ山口とパンプローナには、古くて新しい絆を結ぶときが来ている。

ツイゴイネルワイゼンを聴きながら、鱈料理でワインの栓を抜きたい。

「フランシスコ・サビエルの手紙」について一私の南蛮紀行よりー

岡本浩嘉



司馬遼太郎の著書『街道をゆく』を片手に、その足跡（南蛮のみち）を辿る一私はこのひそやかな愉しみを、公式の親善行事の合い間に満喫した。

私の南蛮紀行の圧巻は、フランシスコ・サビエル生誕の城が舞台である。十余年前、司馬遼太郎の一行を迎えた城守りの老修道士に、はたして今も会えるだろうか。私は、この度同行してくださったハビエル・マルキーネス氏に聞いてみた。マルキーネス氏はパンプローナ市の職員で、現在は、国際交流を担当しておられるのだそうだ。幸いマルキーネス氏は、さしだした本の須田剋太の挿画をみて、会える、と頷いてくれた。それから、傍らの同僚となにやら談笑しはじめた。通訳の阿野道子さんに聞くと、「（絵が）そっくりだ、と言っています。」と教えてくれた。

城についたとき、既に午後7時をまわっていた。目当ての老修道士は、挿画でみるよりもやさしい顔をしている。彼は、私たちを城内へ招じ入れると、つぎつぎに部屋を案内し、その度にこう付け加えた。

「私はファンタスマ（オバケのこと）だ。だから何でも知っている。何でも訊いてくれ。」

司馬遼太郎の著述にも『かれは、二度も三度もファンタスマと言った。』とある。十有余年の歳月に、私の敬愛する作家の寿命は尽きてしまったが、片やオバケは齢をとらないものらしい。

城を辞する直前、私は阿野さんに頼んで老修道士に、或る「おねだり」をしてもらった。

『街道をゆく』の中に、司馬遼太郎がさしだした紙きれに、老修道士がこう記すくだりがある。

『オバケのアルベルディより、心をこめて。』

まさにその頁、そのくだりの箇所と同じ言葉を並べてほしい、と胸元に本と万年筆をさしだしたのである。アルベルディという名の老修道士は、自分が登場するその本について、知っているという風の照れ笑いを浮かべながら胸を反らせた。そして私の頼みに快く応じてくれた。それは私にとって、どんな高価なみやげも及

ばない思い出の品となった。

ただ残念なことに、その記念の言葉の脇には日付がない。話はとぶが、このことについて翌日、親善訪問団員のKさんとお話をする機会を得た。

Kさんは、サビエルのイエズス会と関わりを持っておられ、彼女もまたアルベルディ修道士に会えるのを心待ちにしていた一人だとわかった。実は、Kさんも記念の言葉をいただいたそうだが、やはり日付は記されてなかったらしい。ついでながら、サビエルの書簡にも日付の記述がないものがあり、研究者によって推定されたものが幾通かあるらしいということもKさんから教わった。当のアルベルディさんがイエズス会士であることは言うまでもない。

そういえば、サビエルの書簡を収めた書物のことが、城内でも話題になった。今では幻の本となっている岩波の書翰抄についてである。現地の通訳の方がその書名を口にしたときだったか、訪問団副団長の八木宗十郎氏が、

「サビエルの手紙の本なら私は家に持っていますよ。」

とおっしゃった。

その書籍について、『街道をゆく』ではつぎのように紹介されている。

『私どもは、こんにち『聖フランシスコ・ザビエル書翰抄』（上下）（アルーベ神父・井上郁二共訳・岩波文庫）という本を読むことでザヴィエルに接することができる。

この本は、昭和24年（1949）に初版が発行された。

私は当時フランシスコ・ザヴィエルの上陸四百年祭を京都で取材する記者であったために、この本を、いわばしごとのために読んだ。

こんどザヴィエルをもう一度考えるについて、この本を書棚をかさがしてみたが、どこにまぎれたのか、見つからなかった。あらたに買おうとおもって本屋にゆくと、絶版になっているという。1977年に第三刷が刊行されたが、それも手に入らないというのである。念のために岩波書店に問いあわせてみた。一冊の在庫もなかった。』

私は、この幻の本を持っていると言われた八木さんに帰国後「拝見させてください」とお願いしてお話を請うと、意外なご返事をいただいた。

八木さんの蔵書は、平凡社1986年9月5日初版第三刷発行の『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（訳者河野純徳）といい、幻の本とは別の書物であった。この私の思い違いを八木さんは、
「しかし、ちょっと気になりますね。」

と興味を示し、その蔵書を繙いて面白い話を聞かせて下さったので紹介しておく。

サビエルの全書簡の完訳という大事業を達成した河野純徳氏は、やはりイエズス会士で、彼は『街道をゆく』に紹介されている幻の書翰抄の訳者アルーベ神父に、若い頃師事されていたのである。八木さんの蔵書の見開きには、『この事業は、師の素志を継いだものであり、本書をペドロ・アルーベ師に捧げる』ということが銘記されている、とのことである。

なお、八木さんの蔵書の初版本第一刷が発行されたのは、1985年11月18日となっている。司馬遼太郎が南蛮紀行を執筆したのは1983年であるから、この全書簡集は未だ世に出てはいなかったのである。『街道をゆく』は、古典になった。そう思ったとき、私の思い違いの謎も解けた。

八木さんから伺ったお話の括りに、幻の書翰抄そして平凡社の全書簡集のいずれもが、ドイツ人司祭ゲオルグ＝シュールハンマー師編『聖フランシスコ・ザビエル書簡・文書』を底本としているということを付記しておく。

この旅で私は、サビエルの書簡がイエズス会においてどれほど大切に扱われてきたかを知ることができた。

冒頭に述べた「ひそやかな愉しみ」が昂じたにすぎないのだが、いわば手紙というものを通じてサビエルの偉大さに触れたということになるのか。

話は前後するが、夕刻あわただしく立ち去ろうとする私たちの耳に、荘厳な鐘の音が響いてきた。城郭と相対して建っているらしい教会からだろうか。だとしたらそれは、サビエルがフランシスコの名を授かった教会の鐘の音である。司馬遼太郎は、その著書の中でこう述べている。

『中世のころ、ピレネー山脈の峠々に救護院があって、そこの修道士たちは、いつ来るかわからない巡礼者を待ち、狼の出る冬の夜には終夜鐘をうちならし、病者には必要な手当をした。アルベルディ修道士の精神には、そのような山の修道士たちの伝統が息づいているのにちがいない。』

その鐘は、老修道士が私たちを見送る為のセレモニーだったのかも知れない。

司馬遼を追ひて遙けし南蛮に縁を結ぶ鐘は鳴りつゝ

楽しみは夜更けから

土井としみ



「晚餐会は21時30分からです。それまでホテルでひと休みしてください」

空港からホテルに向かう、バスの中で説明があった。ずいぶん遅く始まるんだなあ、と思ったものの実感はわからない。

もっとも、その日の昼食は午後2時過ぎ。その後マドリッドからの飛行機内で軽い食事も出ていたので、空腹でそれまで待てない、という程ではなかったのだが。

さて晚餐会は、午後10時頃始まった。まず、シャンパンでサルー！。フォアグラの前菜に始まり、主菜は野菜ルリチシャ敷きメルルーサ、鴨のプラム添えと続いた。

でも、それらはもしかしてフランス料理？本格的スペイン料理を思っていたので、いささか意外な気がした。デザートはこっくりと甘いロシアケーキ。

おいしかったが、結構ボリュームがあり、そのうえ時間も遅いせいか（でもそれはほんの序章だったのだ）、少し残してしまった。

翌日はいいよ、メインイベントの日本庭園開園式。スタートはこれまた午後10時。とはいえスペインの夏の日は長く、ようやく薄暗くなり始めた時刻だった。そのためか、違和感はそう感じない。小さい子供たちもたくさん来場していた。

プログラムは民族舞踊に始まり、巨人の踊り、ちょっとぐはぐな柔道剣道、獅子舞と進み、しめくりは、夜空を揺るがす打ち上げ花火。パンプローナ市の心のこもった式に感動し、大いに楽しんだ。

でも、戸外の観客スタンドは、寒くて震えるようだった。時計の針は既に午前0時に近い。

ホテルに帰って、冷えきった身体を熱いバスタブに沈めたい、と思いつつ立食パーティーへ足を運ぶ。

テーブルの上に並んだのは、干し鰯のパイやローストビーフ。おいしそうなケーキや、きれいに盛られたフルーツ。頭は食べたいと言うのだけれど、胃が否だと言う。ああ残念。



特製“土井風パエリア”

さてパンプローナも3日目。今日は来る前から楽しみにしていた、ハビエル城訪問がある日。期待が膨らむ。返礼の昼食会や自由時間のあと出発は午後6時。今やスペイン時間にすっかり慣れていたが、50キロ先と聞いて、ちょっぴり心配になってきた。

7時には着いたが、ハビエル城のある田舎の方では早い時間でもないらしくて、感慨に浸る間もなく、駆け足で見て回った。

帰路、ぶどう畑の中をバスは突っ走る。なだらかな峠を越えると、夕明かりに忽然と現れた中世の城。オリエテの村だった。

暮れなずむ城内はほの暗く、いまにも甲冑の騎士が歩いてきそうで不安な気にさせる。日はとつぷりと暮れ、風も出てきた。

夕食は程近くのワイナリーへ。バスで遠出したのでおなかも空いてきた。今夜はしっかり食べれそう、ワインも楽しみと、話していると、先にワイン工場を見学するらしい。

昔ながらの醸造所を思っていたら、そこはコンピューター制御の近代的工場だった。巨大なステンレスのタンクの間を、ぼそぼそ、とろとろ付いて行く。絞ったワインを一杯ごちそうしてくれないかなあと思いつつ。

ようやくテーブルに着くと、時計は10時半を回っている。しかし、3日目ともなると、遅い時間を楽しむ余裕も生まれていた。

その日の前菜、豆の煮込みは素朴な味付けが気に入り、おかわりをもらったほど。骨付き羊肉のローストも、とてもおいしかったのだが、午後11時を過ぎると、肉類は胃がノーというのか、少ししか食べられなかった。

まさに「楽しみは夜更けから」のパンプローナ訪問だった。それは晩餐会に始まり、夕食会に終わったようでもあり…。

でも、もうちょっとずぶとい胃が欲しいな。

一番星の下の方スタ

山口市国際交流室 山田洋子



「えっ、今更それはないでしょう!」

このところ毎夜届くパ市からのファクスには予想もしない返事の多いこと。6月23日に届いた内容は今まで積み重ねた私達の計画を根底から覆すものだった。

一開会式の催しものはプロの手によるものですから貴方たちのための時間はなくなりました。私たちのもてなしを黙って受け入れてくださいーと。

絶句…! 昨年秋の予算要求時から今日まで、いや、過去3回における造園技師の方々が帰国されるごとに聞く興奮度をどのような手段で市民層に広げることができるか、何としても遠いパ市との距離を何をもってすると短縮められるのか、あんなに議論してきた結果をその度ごとに確認し、了解をとってきたではないか。

すでに送ってある「ちょうちん」「はっぴ」「うちわ」の行方はどうなるのか。

友好都市交流事業は都市間交流を通してその国の人や文化を理解することができる一番効率のよい手段である。反面、参加した人とそうでない人との温度差があり、関わっていない人にどうしたら理解を求められるか、課題は多い。

4月上旬、延び延びになった「山口公園」が長雨のあと、急ピッチで進められている情報をもとに、協力いただいた造園協会の多々良前会長、岡本会長、会員みなさん、山口商工会議所、山口青年会議所の協力

のもと実行委員会を組織し訪問団員募集骨子ができる。「山口公園」が友好の証なら、その証の中核でパ
市民と交流したい。遠かった距離を一気に短縮したい。イベントに協力していただけること、難題ともいえる
この条件を36人の団員のみなさんは快く了解された。「スペインに行ったら、郷に従いましょう。」と多々良孝
一実行委員会会長の発声のもと、踊りとスペイン語の稽古も終え、いよいよ出発となる。お茶席の担当のみな
さんは茶釜、茶碗、菓子と分担して梱包された。とどめに踊りの練習をしている記事をファクスする。—私たち
はこんなに準備しています。山口のことをもっと知って欲しいのです—そう願いを込めて。

天気印訪問団大活躍

400個の紅ちようちんが揺れている。多々良健司さんのアイデアで公園の周りのフェンスに取り付けたものだ。
竹下さんが羽織り、袴で現れると、パンプローナっ子から歓声が上がる。浴衣姿の女性たちはみくちゃで、
手元が見えない。パ市側が、私たちの熱意に押され「開園式の前なら…」と、しぶしぶ交流時間を与えてく
れたものだ。

現地の日本人の家族に一回り大きいラジカセを借りる。「大内のお殿様」の輪は次第に大きくなる。用意し
た千本の「うちわ」もあつという間に観衆の手に。輪の中から「ヤマグチ」、「ヤマグチ」と声がかかる。「楽し
みにしていたのです。」そういった日本人の母親の傍らの女の子の浴衣の帯はサンフェルミン祭用の赤いひ
もでした。

一番星が出ずる前、夕方から降り出した雨は奇跡的にあがっていた。

山口から世界へ

一部のマスコミからの批判が出発前からありました。
批判記事の掲載もありました。その後の私たち担当者の
胸には重い鉛を抱えているような気持ちの日々が続
きました。

国際交流事業は結果がすぐに台頭するものではありません。現在自分たちが行っている事業効果を模索
しながら、自治体の行う事業としていかに市民の心に
蓄積できる計画を立て、実行へと進めて行くことがで
きるか、担当者の資質が問われるところです。

4月、待ち望んでいたサビエル記念聖堂が完成します。
旧聖堂に慣れ親しんだ山口市民にとって、斬新な姿
は議論を呼びました。しかし、旧聖堂は、40年の歳月を
経て、市民の生活や心にゆっくり根を下ろしてきたもの
です。新聖堂は何時ごろとけ込むことができるでしょう。
造園技術者間の友情を中心に「山口公園」開園式
で訪問者40人が受けた感動が新聖堂完成を契機に
多重の輪となって広がっていくに違いありません。

時を経て輝いてきたものに勝るものはなく、市内に点在する「大内文化」、「伝統のまつり」そして、「サビエ
ル記念聖堂」と、この山口から世界へ発信できるものの多さと豊かさに立ち止まっていると背を押されてしま
いそうです。



ヘトヘトとルンルン



「オラ ケ タル!!(こんにちは!!)」小さなプロペラ機に揺られて、いよいよパンプローナ市内の飛行場に到着。パンプローナ市役所職員の出迎え、そして、滑走路横の金網越しに我々を見つめる黒山の人・人・人だかり。山口市訪問団の人氣は、ビートルズを遥かに凌ぐほどすごいものなのか!? 思わず胸を弾ませた。しかし後で聞いてみると人だかりは、ただ搭乗を待っている客だったそうだ。彼らに思いっきり笑顔で手を振った私の振る舞いはいったい何だったのだろうか? やや赤面。

ともあれ、飛行機乗り継ぎ乗り継ぎ、延べ24時間じっと瞼を閉じてたら、地球の裏側、姉妹都市スペイン・パンプローナ市にたどり着いた。

フランシスコ・サビエルが縁で、パンプローナ市と姉妹締結した後、さまざまな分野で交流を積み重ねてきた。そして今回、またひとつ両市の新たな交流の歴史を刻む「山口公園」完成記念行事に参加する機会を得た。うれしい。(でもここまでやって来るのにパンプローナ市との連絡のやりとりは大変だった。)

ところで、私は同じく山口市の姉妹都市である中国・済南市、韓国・公州市の両都市へは、すでに交流事業で訪れたことがある。両市は同じアジアの国、日本文化の源流を体験する旅であり、どこまでも似ている何かを発見して驚くことが常である。これに対してスペイン・パンプローナ市は、どこまでも違う何かを目の当たりにして、驚きおののくことばかりであった。

例えば、強い信仰心。人生で仕事が一番か? はたまた遊びや家族の団らんが最優先か? (スペインは後者、私も後者を選びたいけどなかなか…) 食事時間が30分か? それとも2時間か? (スペインは後者、疲れるので私は迷わず前者を選ぶ) ぬくもりを感じる日本の木造建築に対して、重厚感あふれるスペインの石造建築(アーチ型の天井が落ちてくるんじゃないかと“どきどき”しながらの教会見学)などなど…。



違いはたくさんあるけれど、6月30日の市民交流ではパンプローナ市民と「大内のお殿様」を踊ったとき、彼らの笑顔を見て、やっぱり楽しいことは世界中どこでも楽しいんだと、急に彼らを身近に感じる事ができた。そして、「抹茶の接待」で、彼らは興味津々苦い抹茶をすすった。「おいしいですか?」と尋ねたら、彼らは緑色に染まった歯を見せながら“にかっ”と微笑んだ。真夏にしてはとっても寒かった夜のパンプローナ市民との思い出はいつまでも色あせない。

今回「山口公園」という永遠にパンプローナ市民に愛される“ドッカ”と広がる憩いの空間が完成したことは本当に素晴らしいことである。また、この公園は両市民がお互いの存在や友情をいつまでも忘れることなく、遠く離れた距離を克服させ、心をかよわせるための素敵な友好意識醸成プレイスになったことと思う。

パンプローナ市滞在最終日、土砂降りの雨の朝、「山口公園」を移動バスの中から眺めながら、いつの日か再びこの公園を舞台に、両市民による友情の集いを開きたいと思いつつパンプローナ市を後にした。

アスタ ラ ビスタ!! また会う日までパンプローナ!!

訪問団員紹介

氏名(アイウエオ順)
撮影日/場所
本人から一言…。



赤井 康彦

6月30日/山口公園
先頭で手ほどきしているのが私です。
私はパンプローナでも人気者です。



阿野 道子

6月30日
山口市長夫人とパンプローナ市長夫人の通訳をしているところ(中央)
パンプローナの方々の心温まるすばらしい歓迎の数々。佐内市長様をはじめ訪問団皆様のお支え、一生の思い出となりました。



石光 文次・久子

6月30日/山口公園広場
高層ビルの中にある山口公園で開園前にたくさんの人達で賑わいあう中、ちょっと一休み。



今井 守男

6月30日/パンプローナ市役所前
通訳様と両手に花でパチリッ!



大谷 政勝

7月2日/ハビエル城
1560年、ローマのルネッサンス、レオナルド・ダ・ヴィンチがモナリザを、その前にはミケランジェロがダビデ像を完成しシスティナ礼拝堂の壁面に取り組む準備をしていた頃、サビエルはこのハビエル城で生まれました。491年後の1997年7月2日、山口の著名な添乗員、大谷政勝もこのハビエル城を訪れています。



岡部 京子

6月28日/マドリッド スペイン広場
“憧れてスペイン”のはずが、持ち物の注意で夫にもさんざん言われ、周囲キョロキョロ
ショルダーバックを抱きかかえていなかった写真はコレ一枚だけでした。マドリッドは疲れました。



岡部 敏雄

6月30日/パンプローナ 山口公園
開園式前の雨が式が始まる前にあがり訪問団全員の熱意が通じたとか考えられませんでした。
開園式のあの寒さとパンプローナの人々のあの笑顔が忘れられません。



岡本薫・ユリ子

6月30日/山口公園内
素晴らしい山口公園の完成をパンプローナ市民と一緒に喜ぶことが出来たこと、自分たちが少し自ら庭園造りにお手伝い出来た二重の喜びの中で、滝から落ちる水の音が一層心の安らぎを与えてくれた一時でした。



岡本 浩嘉

6月30日(時刻はすでに7月1日だった)/山口公園の中に建つプラネタリウム館
長時間の寒さから開放されて、1杯のワインに顔が紅潮しています。(当日は異常気象とやらで、市民はみな外套を纏っていた。)
撮影者は、多々良孝一氏。つまりこれは、実行委員長から直々にいただいた“お役ご免”の認状なのです。
友好記念のハッピーを受け取って下さったのは、俳優のシルベスター・スタローン?いえ彼は、パンプローナ市職員のハビエル・マルキーネス氏でした。



小田 雅彦

6月28日/王宮
首都マドリッドに建つ部屋数2700を誇る御影石造りの壮大な王宮。その前庭でビデオを見つめる典型的な日本人観光客の図



嬉とし子 角田 孝子

7月2日/バルセロナ
夕暮れの地中海を背に
この浜辺の近くのレストランでスペインでの最後の夕食をいただきました。名物のパエリアもここで賞味しました。見なれた小魚のフライ等が出てほっとくつろいだ気分になれた事がなつかしく思い出します。



兼重 美智子

7月2日/グエル公園
腰かけて、スペインの青い空を仰げば?
そのベンチは、からだの線の流れ程よくマッチしていました。さすがスペインの生んだ彫刻家の奇才アントニオ・ガウディによって計算しつくしたベンチの曲線でした。
ただ、はんなりとした色の好きな私にとってガウディの色づかいは、少しばかり強烈でした。

訪問団員紹介



兼村 晴定

6月29日／シウダデラ(城塞)での公式晩餐会場
本来なら議長が行かれるところ、推薦をうけて参加しました。公式晩餐会では出席議員に挨拶をして廻りました。ちなみにバンプローナ市では議員27名中、女性議員は5名であります。通訳阿野道子さん、右端はJTB現地社員です。



佐内正治・幸枝

6月29日
バンプローナ市に到着。市主催の歓迎レセプションが終わりホッとしながら退出時のひとコマ。(6月29日夜12時頃)



柴田 篤子

7月2日／グエル公園
バンプローナ市、大好き人間になりました。スペインの人達の心のこもった歓迎に感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。スペイン語話せるようになりたい!



末永 弓子

6月29日／トレド
バンプローナに入る前に撮っていただいたものです。(まだ疲労を知らないころです。)予想をはるかに超える寒さ、食事時間の長さ、ハードスケジュール...にもかかわらず、もう一度スペインに行きたい!!と思ってマス。今度は仕事ぬきで...



杉山 京子

6月30日／山口公園内
見て下さい。この笑顔を見てください。九州育ちの私が、初めて山口の盆踊り「大内のお殿様」を踊りました。それもバンプローナの地で。とても楽しかったです。



竹下 和子(左側)

7月2日／バルセロナ
久しぶりの日差しがまぶしくて...



竹下 隆司

6月30日／山口公園
バンプローナの子の見守り中でお茶を。



多々良 健司

7月1日／答礼の昼食会の後、Hotel Maisonnaveの前の路地にて
スペインバンプローナ市は、都市として適度な広さで、歴史を感じさせる素敵なまちでした。市内の新しい都市公園として整備された『山口公園』も大変よくできておりバンプローナ市の技術と情熱に感謝しております。
p.s.この怪しい写真のまん中が自分です。



多々良 孝一

7月1日／バンプローナ空港
公園担当者と。設計から二年半、すばらしい庭に感謝します。



田原 正美

6月29日／トレド
トレドにて。歴史を感じさせるまちばかりでした。美しいまちを守ろうとする人々の意志を感じました。



田村 千代子

7月2日／グエル公園にて
スペイン旅行中でやっと暖かい日差しを浴びることができました。グエル公園は、バルセロナの街と海を一望できる素晴らしいスポット。ガウディのモザイクのベンチでニッコリ。多くの感動をおみやげに、とてもしあわせな気持ちになりました。



土井 としみ

7月2日
返礼の昼食会終了後、通訳の方たちと並んで。タイプは違いますが二人ともそれぞれ魅力的な美しい女性でした。(中央)

訪問団員紹介



榎松 敏雄

6月30日／パンプローナ

パンプローナの初日、初対面の特別ワインは大変美味でした。



野村 和司

6月30日／山口公園

1000本のうちわがあったという間になりました。



波田 治男

山口公園

今日、山口公園の完成イベントが行われるというのに大雨(夕立)その雨の様子をずっと空を見つめていました。ところが西?北?雲が切れてこんな見事な祭ができました。どーしてどーして、きつと親善が実ったんですネー



福田 礼輔

6月29日／トレド

神々の丘を背にしたワイン疲れの男



藤村 尚美

7月1日／パンプローナ

この写真は、通訳を介し「ハーモニカを吹いてくれた人を呼んで来て欲しい」と言ったパンプローナ市の技術者達との思い出の写真です。「ハーモニカ上手いですね」と言われた時は気恥ずかしい思いでしたが、仲良くなれ幸せでした。

ちなみに、演奏した曲目は、スペイン国歌「国王行進曲」、日本でも知られているスペインの曲「追憶」、そして日本の曲「荒城の月」などでした。ハーモニカぐらいで、こんなにも国際親善に役立ったかと思うと嬉しい限り。(私のハーモニカ演奏場面の写真が自分のカメラに入っていないのが残念です。)



松浦 正明

2000年の歴史をもつ町、誇り高い人々の住む町、静かでゆとりのある町パンプローナ市。陽気、のんき、人なつこい、祭好き、俗にスペインの常識は世界では非常識、逆に世界の常識はスペインでは非常識とまで言われている国民性をもつスペイン、本当に楽しい思い出に残る旅行であった。パール(Bar)で飲んだスペインの赤ワインが忘れられない。帰国後早速赤ワイン党になった。機会をみつけて再度友人と訪れてみたい。



宮崎 知彦

7月1日／パンプローナ市街地のとある公園

見る物、聞く物、食べる物、すべてに驚きの8日間。しばらくはスペインのライフスタイルが身についてしまい、毎食2時間かけてご飯を食べる日が続きました。今回のスペイン訪問で、こんな小さなベンチにもおしりをくっつけて座るほど団員が仲良くなりました。サビエルで結ばれた友情です。(本人一番左)



八木 宗十郎・貞子

7月1日／パンプローナ市のホテルにて

ハビエル・チョウラウト パンプローナ市長夫妻と来月4月の山口での再会を約束しての記念撮影。僕のカメラで通訳が撮ってくれた。“食後のくつろぎのひととき”



山田 洋子

7月3日／バルセロナ市場

日程の最終日、ポケリアー鰯市場と名付けられたこの市場は活気に満ちていた。古書店と市場を訪ねるとそのまちの歴史が理解するという。熱々のトルティーリヤデ・バタータス(ポテトの入った分厚いオムレット)を頬張りながら、特異な表現の機構のまちにすっかりはまってしまった私です。



山根 浩二

7月9日／マドリードの王宮

過酷な取材でしたが熱狂的なサポーターに囲まれしばし取材を忘れてしまいました。



山本 龍隆

6月30日／プラネタリウム

ばくが山本です。後方右側小田さん、左側が岡本さんです。宜しくお願いします。



李 香

7月2日／マドリード コロン広場 (本人左)

コロン広場の“ころん”はコロンプスのこと。コロンプスの真似をして撮ってみました。まだ2日目であれ知らずの幸福な頃。このあと、パンプローナで取材の大変さに泣き、帰国後も連載に泣くとは思ってもいなかった時です。海外は仕事で行くものではありません。(でも、楽しい、貴重な体験ではありました。)少しフォローを。

パンプローナからこんにちは



97年8月30、31日
訪問団員写真展を赤レンガで開催
多くの市民にご来場いただきました



山口公園のミニチュア模型

思い出アラカルト

